

## 【報告】

東日本大震災における一橋大学附属図書館の対応：発災後3年を迎えての記録

小陳左和子（学術情報課）

一橋大学学術・図書部

### 1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、主な被災地である東北三県だけでなく、広範囲に影響をもたらした。東北三県の各大学等においては、震災関連記録の収集・保存が進められているところだが<sup>1</sup>、首都圏においてはこれまであまり例を見ない<sup>2</sup>。

しかし、一橋大学附属図書館（以下「当館」という。）及び周辺地区においても影響を受けており、計画停電への対応など、東北三県の被害とは異なるものはずで、それらを記録しておくことは、今後の防災・減災の参考になると考える。

また、発災後3年を迎える今（2014年1月末現在）、東京など被災地から離れた地域では、原発事故問題を除いては震災が「過去の出来事」のように捉えられている感がある。しかし、地震大国日本においては、大地震を含めた災害がいつか自分に降りかかるかもしれないこととして常に心がけておく必要がある。

そこで今回、当館の職員から発災当時の状況をアンケート形式で収集してとりまとめることにより、当館の記録として残すとともに、一人一人が当時の記憶を改めて呼び起こすことにより、防災への心構えを持つきっかけとすることとした。併せて、当館における震災後の防災対策についても紹介する。

### 2. 職員に対する震災経験アンケート結果のまとめ

#### 2.1. アンケート実施概要

##### 2.1.1. 実施方法

調査対象者に、趣旨を説明した上で、いくつかの設問〔「2.1.4.設問内容」参照〕について、各職員が記憶していることを支障のない範囲で回答するよう、メールで依頼した。

回答の取り扱いについてはあらかじめ、公開に支障のない内容を個人が極力特定されないような記述でとりまとめて学内外へ公表する旨伝えた。

### 2.1.2. 回答収集期間

2013年12月16日（月）～2014年1月10日（金） （4週間）

### 2.1.3. 調査対象者及び回答者数

調査対象者は合計67名で、内訳は次のとおりである。

- 1) 2013年12月16日時点で、一橋大学学術・図書部及び社会科学古典資料センターに所属する、事務職員（常勤・非常勤）及び専門助手 55名
- 2) 上記1)のほか、2011年3月11日時点で一橋大学学術・図書部に所属していたが、現在は学内の他部所または学外の機関に所属する事務職員（常勤） 12名

本学では、学術・図書部職員が勤務する中央図書館のほかに、社会科学古典資料センター、経済研究所資料室、経済研究所附属社会科学統計情報研究センター（以上は国立キャンパス）、国際企業戦略研究科図書室（千代田キャンパス）が設置されているが、今回の調査対象は、中央図書館及び隣接する社会科学古典資料センターに勤務する職員とした。

当時の所属別に分類した調査対象者及び回答者数の内訳は、表1のとおりである。

表1 アンケート調査対象者及び回答者数

回答者種別	当時の所属	発災時の所在	対象者	回答者
A-1	学術・図書部,	館内で勤務	29	24
A-2	古典資料センター	当日不在（休業・休暇・外出） ※2	10	8
B-1	学内の他部所※1	職場内で勤務	4	3
B-2		当日不在（休暇）※2	2	2
C	学外（他機関勤務、本学採用前）		22	14
合計			67	51 (回答率76%)

※1 「学内の他部所」には、経済研究所資料室等の部局図書室を含む。

※2 当日は、入試事務による休日出勤の振替休暇を取得している職員が一定数いた。また、当日午後、東京大学附属図書館において開催された国立大学図書館協会臨時理事会に、附属図書館長、学術・図書部長及び学術情報課長が出席しており、不在であった。

#### 2.1.4. 設問内容

- (1) 2011年3月11日(金)14時46分の地震発生時、あなたはどこにいて何をしていたか？
- (2) 発生直後から帰宅可能となるまで、図書館等の中でどのような行動を取りましたか？
- (3) 当日、帰宅にどのような影響があり、どう対処しましたか？
- (4) 地震発生以降、業務面でどのような影響がありましたか？
- (5) 地震発生以降、生活面でどのような影響がありましたか？
- (6) そのほか、震災や当館・本学の災害対応などについて感じていることがあればお書きください。

#### 2.2. 回答から

2.1.4.に示した設問内容毎に、主な回答を列挙する。本稿の性格上、設問によって、例えば当日館内で勤務していた職員(表1における回答者種別A-1)のみなど、採り上げる回答を限定したものもあり、設問の末尾に【回答者種別】を付した。

なお、当時の当館では、図書館本館1階でサービス系の職員、4階でそれ以外の職員が執務していた。また、社会科学古典資料センターは耐震改修工事中だったため、職員は附属図書館会議室(時計台棟1階)で執務していた。

(1) 2011年3月11日(金)14時46分の地震発生時、あなたはどこにいて何をしていましたか？  
【A-1 当日、館内で勤務していた職員】

- ・ 図書館本館1階のカウンターで利用者対応中だった。／カウンターにいたが、対応する利用者はおらず執務中だった。
- ・ 図書館本館1階事務室の自席で執務中だった。／立って作業をしていた。
- ・ 図書館本館3階の書架・閲覧エリアで、見学者対応をしていた。
- ・ 図書館本館4階事務室の自席で執務中だった。
- ・ 図書館本館4階事務室で、職員向け勉強会を行っていた。
- ・ 図書館本館4階休憩室で、お茶を入れていた。
- ・ 図書館本館4階事務室での用務を済ませ、自席のある1階へ戻ろうとしていた。
- ・ 時計台棟1階の附属図書館会議室で執務中だった。

(2) 発生直後から帰宅可能となるまで、図書館等の中でどのような行動を取りましたか？  
【A-1 当日、館内で勤務していた職員】

※末尾の〔 〕内は、当該職員の発災時の所在位置

○ 揺れている間

- ・はじめは揺れに気がつかず、フロアがざわつきだしてから地震だと気づいた。〔1階〕
- ・直後はそれほどの揺れではなかったので、特段の行動を取らなかった。1階事務室では、棚から物が落下するようなことはなかったと思う。〔1階〕
- ・机の下に潜るなどして自分の身を守る、ということを忘れてしまっていた。〔1階〕
- ・今まで経験したことのない大きな揺れだったので、机の下に潜り、周囲にもそうした方がよいと声をかけた。〔1階〕
- ・直後はカウンターで着席していたが、揺れが長くなってきたのでカウンター後方のPCデスクの下に潜った。〔1階〕
- ・天井の吊り照明が振り子のように揺れており、「あり得ない」と思いながら見ていた。〔1階〕
- ・直後はそれほどの揺れではなかったので館内放送を行うのも躊躇したが、揺れが長時間に及んだので、利用者サービス係職員が、館内放送（時計台棟を含む一斉の設定）により日本語（本棚から離れてください。エレベータは使用しないでください。）と英語（Keep away from bookshelves. Do not use elevators.）で数回繰り返しアナウンスした。〔1階〕
- ・揺れている間も貸出を希望する利用者がいたため、引き続き対応していた。〔1階〕
- ・閲覧エリアの書架がカタカタと鳴り、はじめは誰かが故意に書架を揺らしているのかと思っていたら、大きな揺れが来た。長く続いたので、傍らの柱につかまった。〔3階〕
- ・揺れが徐々に大きくなったため、机の下に潜った。館内放送が聞こえた。〔4階〕
- ・周りの職員と「地震？」と会話した。その後揺れが大きくなり長くなったため、机の下に潜るかどうかわ迷ったが、結局潜らなかった。自分の周りの職員も潜っていなかった。〔4階〕
- ・揺れが収まるまで、机につかまってじっとしていた。机の下に潜らなかったのは、とっさに動けなかったためと、周りの職員に倣ってしまったためである。〔4階〕
- ・周囲や天井を見回して落下する危険物はないと判断し、机の下には潜らなかった。一週間前（3月4日）の消防訓練で起震車を体験したこともあり、落ち着いていた。〔4階〕
- ・事務室内の棚から書類ファイルが多数落下した。〔4階〕
- ・机のひきだしがすべて開いた。〔4階〕
- ・机が事務用書架の付近にある職員が、書架から離れた場所へ移動した。〔4階〕
- ・4階休憩室の食器棚の食器が音を立てて揺れたので、驚いて小さな悲鳴を上げた。〔4階〕
- ・ほかに身を守るものがなく、階段脇の太い柱に身体を寄せた。〔階段使用中〕
- ・揺れはじめてしばらくは室内でじっとしていたが、あまりに長いので、上からの落下物がないことを確認し、正面玄関から外へ出てみた。池の水が強く波打って外にバシャンバシャンと跳ね出していた。〔会議室〕

○ 揺れが収まった後

- ・学外の会議に出席していた管理職に指示を仰ごうと、部長と課長の携帯電話に数十回ず

つ掛けたがまったく繋がらず、課長代理を責任者とする事とした。〔4階〕

- ・揺れが収まってすぐに、事務室からカウンターへ走った。利用者サービス係職員が集合し、館内を点検することとした。また、エレベータ3基（本館及び雑誌棟）は停止したがどの階に停止しているかがわからず、中に人が閉じ込められていないか、各階でエレベータのドアをたたいて確認することとした。〔1階〕
- ・エレベータに使用禁止の貼り紙をした。
- ・館内放送により利用者全員を本館1階カウンター前に一旦集めて、状況を説明した。
- ・全職員の無事を確認した上で、4階及び1階の職員を3名一組（男女混合）とし、館内の点検（利用者の安否、書架等の状況）を行うこととした。
- ・館内点検のため、1階に集合した4階職員により、係長1名＋係員・補佐員5～6名の点検班を2班編成した。また、第二・第三書庫の点検及び照明・空調停止作業を係長1名＋係員1名で行った。
- ・本館1階の入退館ゲート脇に待機し、バラバラと出て行く利用者「気をつけて避難するように」「広い場所へ行くように」と声をかけた。15時過ぎに2回目の大きな余震が発生した時、本館出入口の自動ドアが恐ろしいほどガタガタと鳴った。大げさだが、このままいると死ぬかもしれないとの意識が一瞬頭をよぎった。一旦外へ避難した後で館内へ戻ってきた利用者が、またバラバラと外へ出て行った。利用者から今後の見通しを質問されたが、状況が不明で、ただ声をかけることしかできなかった。余震が収まり、館内へ戻ってきた利用者も落ち着いたので、カウンターへ戻った。〔1階〕
- ・「雑誌棟を点検してください」と指示があり、雑誌棟へ走った。各階でエレベータの扉をたたき「乗っている人はいませんか？」と声をかけていった。1階から5階まで各階を回る中で、避難していない利用者もいたため、「書架から離れてください」「蛍光灯の下から離れてください」と声をかけた。本館1階事務室へ戻る途中、利用者が震源地・震度の情報を教えてくれた。利用者から閉館など今後の見通しについて質問されたが、確たる回答はできず、「もしかしたら臨時閉館するかもしれません。」「一応避難してください。」などと返答した。係長に雑誌棟の状況（負傷者などは見あたらなかった。製本雑誌が多少落ちていた。）を報告した。被害状況の写真撮影を指示された職員とともに再度雑誌棟へ向かったが、撮影中に余震が発生したため、事務室へ戻って待機した。〔1階〕
- ・揺れ続ける吊り照明が落下した場合に備えて、照明の真下を人が通らないように障害物を置いた。〔1階〕
- ・事務室内に大きな被害がないか確認した後、他の職員と2名で4階から順に階段を降りて本館各階を点検した（1階職員が雑誌棟を点検していることは把握していた）。本館2・3階では、予想より書籍が落下していなかった。落下した場所は自分の携帯電話で写真を撮影した後、書架に戻した。利用者は思いのほか冷静で、勉強を続けている利用者が多かった。〔4階〕
- ・揺れが収まった後、4階の職員の無事を確認し合い、他の職員と2名で1階のカウンターへ向かった。到着した時には既に利用者サービス係職員が手分けをして館内を点検していたので、点検場所の指示を仰いだ。利用者へ「大丈夫でしたか？」と声をかけて回った。〔4階〕
- ・雑誌情報係職員全員で、雑誌棟へ点検に向かった。1階から5階まで順に階段を上り、利用者と書架の状況を複数職員で確認していった。上の階へ行くにつれて製本雑誌の落下・散乱が多くなっていた。雑誌が落下したために開かなくなっていた電動集密書架も

多数あった。その場では落下した雑誌を片付けなかった。怪我をしたり動けなくなったりした利用者はおらず、既に荷物をまとめて避難しようとしている利用者がほとんどだった。〔4階〕

- ・揺れが収まった後、本館の点検を開始した。発生後15分以上経っていたように思う。春季休業期で利用者数が通常期より少なかったこと、館内放送により既に避難していたためか、利用者は見当たらず避難誘導は特に行わなかった。今まで経験したことのない規模の地震だったため、館内点検も動揺しながらで、避難誘導する立場という意識が薄かった。〔4階〕
- ・災害時の行動の分担を忘れていたため、周りの職員に確認した。
- ・係の中で1人は残っていた方がよいと思い、事務室にいた。／カウンターに残った。〔1階〕
- ・2人1組で館内点検をすることとなったが、留守番役も残すこととしたため、自分は4階事務室で待機した。〔4階〕
- ・4階職員の多くは、地震の規模感と適切な対応がわからなかったため、利用者対応に関わらずに執務を続けた。防災訓練のとおり実践することは思いつかなかった。そこまでの災害かどうかと、多くの職員が迷っていた。書架がなぎ倒されるぐらいの被害があれば、もっと危機感を覚えたかもしれない。執務を続けながら、大学の判断・図書館の対応が決まるのを待った。〔4階〕
- ・1階は落下物がなかったのであまり混乱はなかったが、4階は書類が落下するなど身の危険を感じたようで、職員は1階に降りてきて、その後分担して各階を点検して回った。〔1階〕
- ・4階の貴重資料室の状況を点検し、落下していた資料数点を書架に戻した。〔4階〕
- ・時計台棟1階の公開展示室を点検することを忘れていた。
- ・館内点検中にも揺れがあり、余震なのか、これからもっと大きな地震が来るのかわからず、怖さを感じた。
- ・情報を集約した結果、怪我人はいなかったこと、書架から落下した書籍がいくつかの場所で多少あったことを確認した。
- ・図書館システム係が雑誌棟1階のサーバ室内を点検し、特段の異常がないことを確認した。
- ・（休業期だったため）今後の学生の行動や施設の利用について、学内の担当部所へ電話で問い合わせたが、明確な回答は得られなかった。
- ・戸外へ出てから会議室へ戻り、図書館職員からの連絡があるまで待機した。〔会議室〕
- ・1階で課長代理と利用者サービス係が、他部所とも連絡をとりつつ今後の対応について協議した。帰宅困難な利用者の対応を巡って協議したが、大学では避難所を用意しないとの情報を得て、図書館でも責任が持てないことから、利用者には全員退館してもらうこととした。
- ・15時30分前に大きな余震もあり、開館続行は無理と判断した。館長・部課長が学外会議出席で不在だったため、事務局長と連絡を取って許可を受けた上で、臨時閉館を決定した。（この場合、指示を仰ぐのが事務局長でよかったのか、疑問を持つ職員もいた。）

- ・ 課長代理と利用者サービス係職員が協議を行っている間、レファレンス係がカウンター対応を行っていた。
- ・ 臨時閉館が決定するまで、通常業務を続けた。
- ・ 4階事務室のテレビで、初めて東北地方が震源地だったと知り、津波の様子を観た（そのとき4階にいた職員の多くがテレビを観ていたと記憶している。[4階]
- ・ ウェブサイトのニュース等でも情報収集を試みた。

○ 臨時閉館決定後

- ・ 15時32分をもって臨時閉館が決定し、利用者サービス係職員が館内放送で利用者に本館1階のカウンター前へ集合するよう呼びかけた。その後、2名1組になり、館内に利用者や荷物が残っていないか見回った。また、荷物を取りに戻った利用者にも同行した。残っていた荷物は、利用者サービス係職員に渡したと思う。
- ・ 臨時閉館が決定したため、本館1階に一旦集合していた利用者に、閲覧席に置いたままの荷物を取りに行ってもらい、帰宅するよう促した。入館しようとする利用者には、臨時閉館する旨説明した。
- ・ 利用者に帰宅を促した後、2～3名の学生から、交通機関の状況把握や家族等の安否確認のために無線LANを使用したい旨の申し出があり、入退館ゲート付近での15分程度の滞在を認め、複数職員で待機した。
- ・ 無線LAN使用希望者の中には東北出身の学生もおり、家族に電話しても繋がらないので、必死に情報収集していた。他の学生と同様の時間帯に退館してもらったが、もっと柔軟に対応してもよかったのではないかと、今となっては思う。
- ・ 大学事務局本部から早期帰宅するようとの連絡があり、係長を集めて説明した。
- ・ 完全に利用者が退館したことを確認した後、16時前に職員は勤務終了時間前でも帰宅してよいとの指示があった。帰宅する人を見送りつつ、自分は1階休憩室でテレビのニュースを観ながら勤務終了時間になるのを待って帰宅した。
- ・ 勤務終了時間まで待機するよう指示があり、帰り支度をして1階休憩室に集合した。
- ・ 18時少し前に、帰宅不可能な職員を残して帰宅した。
- ・ 利用者サービス係において、臨時閉館する旨を、館内掲示、附属図書館Webサイト及びHWP（Hitotsubashi Work Place：学内情報共有ツール）により告知した。それらの業務を終えて退館したのは19時頃だったように思う。
- ・ 部長室の電話が「行政電話」のはずなので繋がりにくいのではないかと聞いて部長室の電話から再び部課長の携帯電話に何度も掛け続けたところ、繋がった。当日から翌々日までの臨時閉館の事後承諾を得た。
- ・ 1階休憩室ではテレビのニュースを流していたが、自分はほとんど観ずに家族へ連絡を取っていた。津波の被害について知ったのは、翌日テレビを観てからだった。
- ・ 携帯電話は通話もメールも繋がらなかった。PHSは繋がったので、家族と連絡を取れた。
- ・ 職員の中に妊婦がいたので、家族に迎えに来てもらうように言った。

(3) 当日、帰宅にどのような影響があり、どう対処しましたか？

【A-1, B-1 当日、館内または学内の他部所で勤務していた職員】

- ・ ウェブサイト、Twitter、テレビを確認したところ、JRなどの電車が運行を停止していた。
- ・ 帰宅を決意した職員が、道路地図の必要なページを各々コピーした。
- ・ 同じ方面の人と集団で大学を出て、徒歩で帰宅した。(人により40分～3時間以上)
- ・ 約5km歩き、その後バスに乗って帰宅した。
- ・ バスに乗ろうとしたが混雑して乗車できず、徒歩で帰宅した。
- ・ 動いている電車やバスを乗り継いで行けるところまで行き、最終的には徒歩で午前2時頃に自宅に到着した。
- ・ バスを乗り継いでたどり着いたバス停まで、家族に車で迎えに来てもらった。そのバス停から自宅まで、通常は車で30分程度のところを約3時間かかった。
- ・ 当日、定年退職者のお祝い会が予定されており、店に連絡も取れないのでとりあえず行ってほしいと幹事から言われた。そのような状況のためとても躊躇したが、店も用意をしており、参加予定者の半数が参加した。余震が続いたこともあり、予定より早めに終了し、バスを待つ長蛇の列に並んだ。約40分バスを待ち、乗車後は通常30分のところを2時間30分かけて到着し、さらにバスを乗り継いで、家についたのは午前1時頃だった。バス会社の方で適切に誘導してくれた(バス会社の退職者の応援があった模様)。
- ・ JR国立駅やJR立川駅は、シャッターが降りて閉鎖されていた。
- ・ 21時頃、多摩都市モノレールは平常運転していた。
- ・ 遅い時間から地下鉄や私鉄が運行を再開したようだった(JRが一番遅かった)。
- ・ 車通勤のため、同僚を電車が動いている私鉄の駅まで送ってから帰宅した。
- ・ 国立駅まで一旦行ったが、交通機関の状況から帰宅を断念して附属図書館へ戻った。
- ・ 帰宅を断念した職員は4階事務室と1階休憩室で男女各3名に分かれ、ソファ等で仮眠した。
- ・ 教職員は、ニュースを確認しながら帰宅できる可能性を探り、滞在者が徐々に減っていった。
- ・ 非常食を確保するためにコンビニへ行った職員は、商品がほとんどなかったと言っていた。

(4) 地震発生以降、業務面でどのような影響がありましたか？

【A-1, A-2 当時、中央図書館及び社会科学古典資料センターで勤務していた職員】

○ 通勤

- ・ 3月14日(月)は、節電のためJR中央線の立川駅以西が区間運休となった。このため、バスや他の電車を乗り継いで通勤した。
- ・ しばらくの間、JRが電車本数を大幅に減らしていたため、朝は歩いて通勤した。
- ・ しばらくの間、公共交通機関が使えなかったため、自転車で通勤した。

- ・ 通勤困難な場合、特別休暇として処理できるとのことだった。学内の宿泊施設（佐野書院）は、自費で利用可能との案内があった。通勤可能な親類等の家から、通常とは異なる経路で通勤した場合の交通費は出ないとのことだった。
- ・ 計画停電の影響で電車が運休した日は特別休暇を取り、間引き運転の日は出勤した。
- ・ 通勤に利用している路線が計画停電の影響で数日間終日運休となり、その後も1日2時間弱の運行だったため、1週間以上出勤できなかった。
- ・ 3月17日(木)に、供給電力が足りずに大規模停電が起こるのではないかと噂が流れ、帰宅する人々の時間帯が集中して交通機関が大混雑した。

○ 被害

- ・ 書架から落下した〔写真1, 2〕、または棚板から手前に飛び出た蔵書があった。3月14日(月)に職員が片付けた。作業中は余震の情報をすぐ得られるように、館内放送でラジオ番組を流した。集密書架内の作業では、余震があったらすぐに通路に出るようにした。
- ・ 4階事務室の書架やキャビネットから、図書や書類、ファイルが落下した〔写真3〕。3月14日(月)に4階の職員が片付けた。
- ・ 大閲覧室の天井角に若干ひび割れが発生し、施設課に修繕を依頼した〔写真4〕。
- ・ 社会科学古典資料センターの書庫では、貴重書が1冊落下したのみに留まった。



写真1 書庫4階（図書の落下）

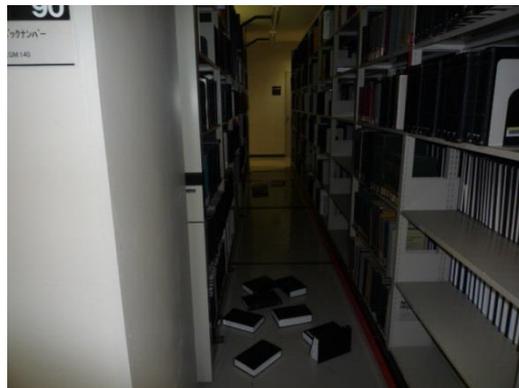


写真2 雑誌棟5階（製本雑誌の落下）



写真3 4階事務室（図書・文書の落下）



写真4 大閲覧室（壁のひび割れ）

○ 業務面

- ・ 3月14日(月)・15日(火)は休館とし、16日(水)から開館を再開した。
- ・ 書架整理作業には数日間専念し、3日後ぐらいから通常の担当業務を再開した。
- ・ 3月15日(火)から27日(日)頃まで、計画停電が実施された。西キャンパスは停電したが、東キャンパスは計画停電地域外で停電しなかった。
- ・ 計画停電により、2時間しか開館できない日もあった。短時間のため、1日あたりの総入館者数は少ないが、開館時間中は普段の休業期と同程度の利用があった。
- ・ 計画停電は計画通り実施されない場合もあり、極力サービスに影響が出ないように開館時間を調整し広報することに苦慮した。また、停電日時は第二候補まで公表され、その時間帯にも閉館したが、実際には停電する確率が低かったため、利用者からは不満の声が聞かれた。  
3月23日(水)頃からは、計画停電回避により開館できる時間が増えていった。
- ・ 節電が強く求められ、館内の照明の一部を消灯し、OPAC(館内目録検索)端末の起動台数を減らした。利用者か市民から、時計台の夜間照明も消灯すべき、との声があったようだ。
- ・ 他館に依頼した文献複写物や借受図書が到着した際に、申込者へ通知するメールに、計画停電による開館予定日時を記載した。
- ・ 国立情報学研究所(NII)のサーバ(NACSIS-CAT/ILL、CiNiiなど)を利用する業務では、計画停電の日程が国立(大学所在地)と西千葉(NIIサーバ所在地)とで異なるため、業務の調整に苦慮した。外部委託していた目録遡及入力事業では、館内での作業から、受託会社(23区内)へ図書を持ち出しての作業に急遽変更した。NIIサーバ停止中の目録入力は、大学サーバのみでできる作業を行い、後日NIIサーバへアップロードするなどの対応をした。大学の停電日は、図書へのバーコード・ラベル貼付などの手作業を中心とした。NIIサーバ停止中のILL(図書館間相互利用)業務では、他館から現物を借り受けた図書の返送自体はできるが、ILLシステムでのステータス変更ができなかった。
- ・ 当時は、図書館業務システム停止・再起動を完全自動化していなかったため、停電の都度、一部手動で行う必要があったが、照明の点かない夜間のサーバ室での作業には苦勞した。特に、18時20分~22時の計画停電の際は、復電するまで待機して作業を行うため、遅くまで残業することとなった。
- ・ 計画停電の日は、通電中に極力PCでの作業を行った。特に図書・雑誌の契約・受入業務では、年度末の精算や次年度の契約更新の時期だったため、時間調整に苦慮した。
- ・ 計画停電の日はエレベータが使えないため、各階への配架は複数の職員によりバケツリレー方式で行った。書庫内は日中でも資料が判読できないほど薄暗く、懐中電灯を使っても配架・出納作業は困難だった。
- ・ 計画停電中の照明は日中の外光のみのため、書架整理や事務室片付けをしていた。また、充電していたノートPCでの文書作成や、プリントアウトしておいたリストのチェックなどを行った(自宅からノートPCを持参した職員もいた)。しかし、本館1階は外光がほとんど入らないため、作業に支障を来す暗さだった。
- ・ 計画停電が夕方時間帯になった場合は、照明が使えず業務継続が困難なため、勤務終了時間前に帰宅してよいとの指示があった。

- ・ 計画停電の日、帰宅する18時頃は館内が暗く、エレベータも動かないため、4階から誘導灯・非常灯を頼りに恐る恐る階段を下りた。
- ・ 非常灯は、1～2時間程度しか点灯しないため、残業時に真っ暗になったのを経験した。
- ・ 計画停電中は公開展示室を終日閉室し、その後もしばらくの間午後のみ開室とした。
- ・ 計画停電中は、トイレが利用できないことにも困った。停電していない東キャンパスのトイレを利用した職員もいた。
- ・ 余震への警戒及び節電のため、エレベータはブックトラックのみの使用に制限し、利用者・職員ともに階段を使用することとした。約1か月後、人も自己責任で使用してよいことになったが、節電の観点から階段利用が推奨された。
- ・ 節電のため、日中は時計台棟1階の廊下の照明を消灯することとした。
- ・ 計画停電や節電のために暖房を点けなかったため、人や場所によっては寒いと感じた。
- ・ 館内の懐中電灯の台数が少なかったため、停電時の作業用に新規購入しようとしたが、懐中電灯、乾電池ともにしばらくの間入手できなかった。
- ・ 震災前に他大学からの来館利用の予約があったが、来館を見合わせた人が何人かいた。
- ・ 図書・雑誌の納品に影響が出た。特に洋書は、当該年度の予算で購入するために年度内に納品する必要があったが、ほとんどの運輸業者が東京への配送を停止しており、苦慮した（国際宅配便“DHL”が唯一業務を継続していたため間に合った）。また、ガソリン不足により、成田空港まで到着しているがそこからの運送が困難という時期があった。
- ・ 北米の大学図書館に複写を依頼した文献が、3月11日時点で発送状態になっていたのに1か月経っても届かなかったので問い合わせたところ、大震災が発生したと聞いて発送を止めてしまった、とのことだった（NACSIS-ILLでは、一度「発送」の状態になると変更されないため、別の手段で連絡する必要がある）。
- ・ 本学紀要の発送作業を3月17日(木)に予定していたが、翌月に延期した。4月に発送した際に、東北地方の機関宛も含まれていたが、届かずに戻ってきたものはなかった。
- ・ 3月下旬に予定されていた書架増設工事が、工場の生産（あるいは流通か）の遅れから、4月10日(日)に延期された。
- ・ コンテンツ係では大学ウェブサイトの管理を担当しており、震災後はウェブを通じた教職員・学生へのお知らせが不定期・頻繁に発生したため、更新作業に追われた。
- ・ 社会科学古典資料センターでは、当該年度に行っていた耐震改修工事の最終段階を迎えていたが、請負業者が福島県への資材搬入を行うことになったため、こちらの作業への要員確保調整を行う必要があった。
- ・ 水道停止の可能性を考えて、作業後の手洗い用などのために水を汲み置きしておいた。

○ サービスの変更

- ・ 被災地域大学の構成員に対して、協定校とほぼ同様の手続きで入館できるようにし、館外貸出を実施した（登録者数2名）。
- ・ 新学期開始が2週間遅れたことに伴い、毎週土曜日に授業が実施された。授業を実施する休日にも、平日と同様のサービスを行うために、利用者サービス係及びレファレンス

<p>係から1名ずつ出勤することとなった。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 帰省中に被災した学生（2名程度）から、図書（10冊程度）の亡失届が提出され、現物弁償を求めないこととした。</li></ul>
<p>○ 体制の変更，改善事項など</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 発災時に館長・部長・課長全員が外部での会議に出席していて不在だったことから、その後は部課長のいずれかは残留することとした。</li><li>・ 非常放送用の台本を、和英併記で用意した。</li><li>・ 発災時には学内に危機対策本部が設置されることとなった。</li><li>・ 危機対策本部では、コンテンツ係は情報発信班を担当し、夜間や休日に発災した際の大学ウェブサイト更新体制の構築、マニュアル作成などを行った。</li><li>・ 全学で、災害対応物資の整備が行われた。学術・図書部からは懐中電灯、拡声器、職員分のヘルメットなどを要求し、2011年度末に納品された。</li><li>・ 大学ウェブサイトの携帯電話対応ホームページが作成されることとなった。</li></ul>
<p>○ その他</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 3月12日(土)は、入学二次試験（後期）の入試事務当番だったが、大学ウェブサイトに中止・延期の通知がなかったため、予定通り出勤した。当日になって日程を延期することが決まり、延期の通知文書発送作業を行った（その後、試験は中止になった）。</li><li>・ 3月23日(水)に予定されていた学位記授与式（卒業式）は中止になったが、キャンパスには着飾った卒業生や保護者が来ており、写真撮影するなど和やかな雰囲気になっていた。</li><li>・ 大学へは、海外の協定校から災害見舞のメールや手紙が届いた。</li><li>・ 全学で、被災地支援の物品提供・募金を行った。</li><li>・ 絵本を被災地に贈りたいとの教員が、学生サークル「チーム・えんのした」の協力を得て、約3,000冊の絵本を集めた。教員と学生代表が、南三陸へ持参した。</li><li>・ 大災害が発生している中で通常業務を行うことに、何か居心地の悪い思いもしていた。</li></ul>

**(5) 地震発生以降、生活面でどのような影響がありましたか？**

**【A-1, A-2, B-1, B-2 当時本学で勤務していた職員 / A-5のうち首都圏在住者】**

<p>○ 地震当日</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自宅は、土台にひび割れ、壁紙に隙間などができた。地震保険を請求したら一部損の認定が下りた。</li><li>・ 自宅のガスは自動停止装置が作動して停止していたが、解除したらすぐ使えた。</li><li>・ 自宅では、天井まで突っ張り棒を付けた本棚は問題なかったが、付けていなかった本棚と冷蔵庫が移動していた。姿見が倒れて割れた。落下物もいくつかあった。</li></ul>
<p>○ 計画停電・節電</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自宅は計画停電の対象地区になった。暖房が使えなかった。浴槽ややかんなどに水を溜</li></ul>

めた。トイレの水が流せず、風呂の残り水を汲んで流した。夕食を作る時間帯に停電になるのが最も不便だった。

- ・ 計画停電時に帰宅時間が重なると、信号が消えてしまうので怖かった。夜道は月明かりだけが頼りというほど暗く、首から下げる小さなランタンが役立った。
- ・ 自宅は計画停電の対象地区だったが、結局停電はなかった。
- ・ 計画停電のエリアや時間の設定が煩雑で、かつ、計画通り実施されなかったり頻繁に変更されたりした。自宅が計画停電のグループの境界にあり、どちらのグループかわからなかった。
- ・ 休日に計画停電が予定された時には、非常に不安に感じ、他地区の友人宅に泊めてもらった。
- ・ 計画停電中は、近所のスーパーは臨時閉店していた。
- ・ 家族の勤務先では、計画停電の影響により通常とは異なる勤務シフトとなり、夜勤や休日出勤が発生した。
- ・ 電気を使わない暖房器具の必要性を感じ、石油ストーブを購入した。
- ・ いかに普段の生活で電気を利用しているか意識するようになった。節電を心がけた。
- ・ 節電のため、街中や店内、駅、電車内が多少暗くなったが、これで十分だと感じた。
- ・ 節電のため、街中がうす暗くなり、気持ちも少し暗くなってしまった。

#### ○ 食料品・日用品

- ・ 米、おにぎり、パン、インスタント食品、レトルト食品、野菜、果物、納豆、ヨーグルト、牛乳、使い捨てカイロ、懐中電灯、ティッシュペーパー、トイレットペーパーが品薄になった。自宅に非常食を備蓄するようになった。水やカセットボンベが完売し、西日本の親類から送ってもらった。ろうそくや乾電池も品切れになっていた。
- ・ 子どもがいるので、水道水から放射性物質が検出されたと聞き、ミネラルウォーターを求めて、帰宅時に毎日スーパーを回った。しかし、どの程度危険なのか判断がつかなかった。
- ・ 放射性物質漏れの情報があったため、わかめと納豆を買いだめした。
- ・ コンビニの食料が品薄だったので、弁当と飲み物を持参するようになった。
- ・ 食料品が品薄で困ったので、朝1時間休暇を取ってスーパーに並んだことがあった。
- ・ 懐中電灯を買えなかったが、アウトドア用ヘッドマウントライトが役に立った。
- ・ ガソリンが入手できず困った。友人とガソリンスタンドの入荷状況をメールで連絡し合った。ガソリンスタンドにガソリンが入荷された日は、早朝から車が長蛇の列を作り、渋滞を起こしていた。ガソリンスタンドの列は、4月中旬まで続いた。ガソリンや灯油の価格がどんどん上がっていった。普段は週末に車で食料品のまとめ買いをしていたが、ガソリン不足のため、毎日自転車ですれずつ買い物をするようにした。灯油は、発災約一週間後に10リットルだけ購入できた。
- ・ 大型スーパーでは品切れでも、個人商店では通常通りの在庫で営業している場合があった（米、ティッシュペーパーなど）。
- ・ 車がないと不便な地区にあるスーパーでは、ガソリン不足の時期には客が少なく、却っ

て入手しやすいという状況もあった。

- ・ トイレットペーパーが不足すると報道されてすぐ購入したが、実際はそれほどでもなく、慌てる必要はなかったと思った。
- ・ 停電になっても、冷凍食品に目に見える影響がなかったことに驚いた。
- ・ 震災後3月下旬に西日本へ行った際に、スーパーの照明が明るく、商品が豊富にあり、本当に同じ国か?と思った。

○ その他の影響

- ・ 通勤・外出時に、水、携行食、懐中電灯、防犯ブザーを持ち歩くようになった。
- ・ 夜に入浴していたが、地震や停電があると対応できないと聞いたため、朝に変えた。
- ・ 余震が長く続いたので、なかなか安心して暖房や風呂が使えなかった。
- ・ 東京にも放射性物質が飛来するという情報を聞き、洗濯物を室内に干すようにした。
- ・ 福島第一原発の報道に、非常に不安を感じた。学内で行われた原発事故に関する講演会を聴講するなどして、自分なりに冷静に判断しようと努めた。
- ・ 被災地の親類から、災害直後やしばらく経ってから必要になるものを聞いて、準備した（現金、厚手のブルーシート、ひも、ラップ、ビニール袋、タオル、水の要らない歯みがき用品・シャンプー、エタノール、生理用ナプキンなど）。
- ・ 被災地の親類から、壊れていない物を片付けるより、壊れてしまった物を片付ける方が重労働との話を聞いた。いつ何があってもおかしくないのだから物を少なくしておきたいと考え、自宅の片付けをするようになった。
- ・ テレビでは、東北の現状や生活情報よりも、津波や災害、原発の様子、地震発生の原因ばかりが流れていた。刺激的な映像ばかりなので、観ないようにした。生活情報を得る際には、インターネットを使うようにした。
- ・ 発災1週間後、子どもにフラッシュバック（思い出して泣くなど）の症状が出た。
- ・ 子どもの幼稚園や学校で、飲料水や校庭の放射能の値、給食の材料の産地などに関する会議が、毎月1回約3時間、2年ほど続き、都会のエゴを感じた。
- ・ 3月中は震災を常に意識していたが、計画停電が回避される頃（3月末）になると、日常に戻ってしまった感がある。
- ・ 物資が不足している被災地へ何か送りたいかったが、配送できるまで1か月かかった。
- ・ 被災地の実家の家族へ、約1か月間毎日電話をした。
- ・ 実家の地域に液状化の被害があり、家屋半壊の認定を受けた。見舞に行きたかったが、トイレなども使えず不便なので来ない方がよいと言われた。

(6) そのほか、震災や当館・本学の災害対応などについて感じていることがあればお書きください。 【全回答者】

○ 東日本大震災での対応・行動について

- ・ 職員は比較的落ち着いて行動していたと思う。

- ・ マニュアル通りに行動できなかった。各職員の役割を決めていたが、ほとんど覚えておらず、その場で決めていた。
- ・ 当日は管理職が不在で、想定していた指令系統が最初の時点で崩れた。管理職の不在は、職員の不安を増大させたと思う。
- ・ 管理職が不在だったとしても、非常時に迅速に適切な対応ができるかどうかは、現場職員の判断力・行動力によるところが大きいように感じた。
- ・ 今回、まずは利用者の安全を考慮し、次に職員を、としたが、災害の規模によっては利用者と職員が同時に避難することや、図書館・大学に宿泊するという事態も想定される。避難誘導ひとつをとっても、図書館職員や大学職員には、多くの人命を背負っている責任がある。
- ・ 電話・メールが繋がらず、頭の中がパニックになった。「災害伝言板」のことを思い浮かず、家族に連絡をとれなかったこと、とにかく帰宅することばかりに気を取られていたことは反省すべきだと思った。
- ・ 職員の中で、帰宅可能と判断した人は早々に帰宅し、困難と判断した人は各自で何とかするという状況だったが、近距離通勤者が手分けをして帰宅困難者に自宅に泊まってもらうなど、サポートすればよかったと感じている。
- ・ 交通機関が運休する影響の大きさを感じた。早い時間に情報があれば、早期に行動を開始でき、別の方法で帰宅できた場合も少なくなかったはずである。災害時は正確な情報の把握と伝達が欠かせないと思った。
- ・ 発災直後は被害の正確な情報を把握できなかったが、情報を追っているとどんどん公表される死傷者数が増えていき、ショッキングな映像も流れてきて恐怖心が増していった。特に、テレビで気仙沼の大規模火災の映像を観た時のショックは今でも覚えている。
- ・ 東京にいと、交通機関の混乱、食料品・日用品の品不足、計画停電、放射性物質漏れなどが身近に感じた問題であり、活動としては募金と節電ぐらいしかしなかった。パニックにならないよう、買い占めなどを行わないよう、世間の雰囲気流されず日常を過ごすことを意識していた。
- ・ 海外の利用者や協定校の人々が、震災直後に心配してメールを送ってくれた。計画停電が続き神経が張り詰めた雰囲気の中で「世界中の人々があなた方を見守っている」という文面にずいぶん励まされたのを思い出す。

○ 当館・本学の災害対応について

- ・ 個々の職員レベルではある程度対応できる気がするが、組織（図書館、大学）としてどう対応すべきか、という点ではまだまだだと思ふ。意思決定ルートの実確な確保・周知と、「このような行動を心掛けよう」という意識の統一・徹底が一番重要で、細かな行動については訓練で慣れておくことが現実的かと感じている。
- ・ 訓練を経験している今なら躊躇なくできるであろうことが、発災当時は行動に迷いがあつた（特に、利用者へどのように声を掛けたらよいか、とても迷つた）。
- ・ 訓練で、何をすればいいかをよく体に覚え込ませておくことが大事だと思う。子どもの頃から、地震が起きたら机の下に潜れと言われていたため、今回もとっさに潜つた。
- ・ 震災後の訓練は、以前よりも具体的な内容になり、いざというときに行動しやすいように改善されたと思う。

- ・小中高校で実施されているような、教職員・学生全員が参加する訓練を実施した方がよい。
- ・訓練が毎回同じ時間帯（15時前後）に実施されるのが気になる。朝や夜間にも行う方がよい。職員も異動し担当も変わるので、何度でもいろいろなパターンでやるとよい。
- ・訓練に真剣味が足りないように思う。また、大きな声を出して避難誘導する訓練、停電を想定した訓練、時間外の訓練が必要と思う。
- ・訓練時や小規模の発災時には、「恥ずかしい」という気持ちがあり、取るべき行動を実践に移せないということがあるのではないか。
- ・全学の訓練が年1回しか実施されないのはもったいない。
- ・図書館独自の災害対応マニュアルを整備できてよかったが、今後も見直しして更新し続けることが必要だと思う。誰が担当であっても同じ対応ができるように、役割分担を明確にした上で訓練しておくことが大事だと考える。
- ・マニュアルだけでなく、壁などに災害時にやるべき事項を記載した紙を貼っておき、その場で誰がどれを行うかを決めていけば、もれなく素早い行動が可能になると思う。
- ・自席にいる時に発災するとは限らないので、館内のどこにいても取るべき行動の原則（例えば、とにかく利用者を誘導する、単独行動は避ける、など）を定め、職員一人一人が臨機応変に対応できる仕組みを構築するのがよいと思う。
- ・図書館や大学で、震災をきっかけに、訓練や帰宅困難対応について真剣に取り組み始めてよかった。それまでは、大学全体の消防訓練がある程度で、図書館でも独自に訓練をやった方がよいのでは、と同僚と話していた。
- ・各職員にヘルメットが配付されてよかった。発災直後の館内点検時に、ヘルメットがあればいいと感じていた。
- ・災害対応用品は少しずつ整備されているが、普段の配置場所に工夫が必要だと思う。いざという時に使えない場所においては意味がない。
- ・平成24年度に行っていた、係単位での定期的な館内点検当番を復活すべきである。
- ・夜間や休日の開館時間帯は、2名勤務体制（院生または委託業者社員）となる（さらに昼休みは1名となる）ため、体制に応じた対策や訓練の実施が必要である。
- ・今回の震災では、大学本部からの指示は全くなかったと記憶しているので、特に学生への対応について、図書館でどこまで独自に判断できるのか確認しておいた方がよい。当日、早々に利用者を館外へ出してしまったが、二次災害の危険性、交通機関の状況などを考えると、それでよかったのかどうか今でもわからない。帰宅困難者の対応や国立市との連携を想定した訓練を行わないと、大規模災害に対応できるか疑問である。
- ・館内で作業を行う委託業者社員のことは、担当係以外の職員は名前も知らない状態だったが、安全確認を行えるようにしておく方がよいと思う。
- ・図書館から戸外への避難経路は、扉が狭い、南口や通用口から出る道は狭く、落下物を避けにくい、など、多数の人が迅速に避難するには難しい建物構造である。
- ・発災時に、普段は閉じている時計台棟の重い大扉を開放する作業に危険を感じる（重い扉を開放しに行った人が、その扉に挟まれて亡くなったという報道を見た）。
- ・図書館は書架が多数あるので、倒壊するととても危険である。また、ガラスや書籍・物品の崩れやすい場所などを点検し、身を守る方法や誘導に慣れておくことが必要だと思う。

う。

- ・大地震発生時には蔵書が大量に落下することを想定して、どのような整理や修理の方法が効率的か、考えておきたい。
- ・図書館本館の地下は、広くて丈夫で窓もないため、大学全体のシェルターとなり得るのではないかと、図書館が担う役割は大きいのではないかと思っている。
- ・発災時に館内放送を「一斉放送」にした場合、時計台棟の教員研究室にも流れるため、それも意識したアナウンス内容が必要かもしれない。
- ・発災時には無理に帰宅しようとせずに待機した方がよい、という報道を見たが、そのためにも確実に保管・入手できる場所に最低限の備蓄が必要だと思う。
- ・大学の避難訓練では、避難場所における避難者への指示が少々もたついている印象を持った。避難者をいかにうまくまとめるかによって、その後の混乱の度合いが変わるのではないかと思う。学外からの避難者が多数来ること想定すべきであろう。
- ・学外の帰宅困難者の受入は必要だと思う。その場合、我々大学職員は「避難所の職員」という立場になることも想定して訓練しなくてはいけないのではないかと。
- ・学内では、震災を経て災害対応のルールを決めたはずだが、2012年の大型台風接近時の休校措置通達で活かされていなかった。制度設計の見直しが必要と思われる。
- ・他の機関では、安否確認システムが整備されていると聞いている。本学の安否確認方法が心配である（避難場所でのICカード読取による安否確認を行うこととなっているが、訓練において実際の規模で行われていない）。
- ・今回の経験で「あの大地震でも大丈夫だった」という認識により、災害の備えが却って疎かになっているように感じる。
- ・地震、火災、水害のほか、被爆、ミサイル飛来、凶器を持った不審者など、あらゆる災害への想定、みんなで考える場が必要だと思う。

### 2.3. 回答のまとめ（概要）

発災した時点では、ほとんどの職員が1階のカウンターか1階・4階の事務室で執務中であり、複数の職員でどう対応するか話し合いながら行動していった様子が想像される。あらかじめ決めていた災害時の役割分担はあまり守られなかったが、戸惑いつつも臨機応変に対応していたのではないかと。大きな混乱は起きずに利用者を館外へ避難させて臨時閉館としたものの、その後の交通機関の混乱状況を知ると、帰宅困難になったかもしれない利用者への対応がそれでよかったのか、今でも迷う声は少なくない。

こうして列挙してみると、(2)の発災後の行動については、回答者によって若干の矛盾や食い違いが見られる。理由としては、3年近く時間が経ったことや当日の混乱により記憶が曖昧な可能性がある、当日職員間で連絡事項が伝達される間に少しずつ内容が変化していった、職員の居場所や立場などによって見聞きしたことや感じたことが異なる、などが考えられる。しかし今回は、現時点での職員の記憶や想いを記録することを目的としたた

め、敢えて内容を調整せずにそのまま記載した。

発災の翌週以降は、業務面でも生活面でも、交通機関の混乱や計画停電への対応に苦慮している。加えて、日常生活では、食品・日用品の不足、原発事故への不安が影響を及ぼしている。そんな中でも、被災地の様子を思いやり、努めて冷静にふるまおうとしている様子、今後への備えを開始した様子を読み取れる。ただ、計画停電が実施されなくなった3月末以降は、徐々に業務も生活も通常に戻り、照明の暗い街中にも慣れたようである。

(6)では、当日やその後の行動を振り返って感じたことや反省、当館や本学の災害対応への提言などが書かれている。防災に対する意識は、震災前後で明らかに変化が見られる。

### 3. 震災後の附属図書館における地震対策の取り組み

#### 3.1. 館内における災害対応検討体制

##### (1) 2011年度

当館における災害発生時の対応について検討するために、学術・図書部職員6名による「災害対応WG」を2011年6月から2012年1月までの間設置した。このWGでは、『災害対応マニュアル』の作成〔3.2.参照〕、図書館独自の災害対応訓練の企画と実施〔3.3.参照〕、災害対応用品の整備〔3.4.参照〕を目的として活動を行った。

##### (2) 2013年度

学術・図書部職員6名による「危機管理対応のためのプロジェクトチーム」を2013年10月に設置した。このチームでは、図書館業務における危機管理全体を視野に入れているが、2013年度内は、『災害対応マニュアル』の更新、これまでの実施経験の反省を踏まえた災害対応訓練の見直しと実施を主な目的として活動を行っている。

#### 3.2. 『災害対応マニュアル』の作成

本マニュアルは、2011年度災害対応WGで検討の上で作成し、2011年12月22日に第1版を館内に公表した。その後も、職員の異動に合わせた緊急連絡網の更新など微修正は行っているが、今後は毎年の災害対応訓練の結果も踏まえて見直しを図っていく予定である。

内容は、災害対応のフローチャート、図書館災害対策本部の設置、館内放送シナリオ、臨時閉館の基準、避難誘導の手順・経路図、負傷者発生・火災発生時の対応、職員の参集の基準、緊急連絡網とし、災害対応用品リストや災害時の掲示物を附録としている。

学術・図書部及び社会科学古典資料センター職員全員に、印刷したマニュアルを配付し

ており、新たに配属された職員にも、着任早々に手渡して読んでおくように伝えている。

### 3.3. 災害対応訓練の実施

2011年度から毎年1回、附属図書館独自の災害対応訓練を実施している。本学では、防災訓練または消防訓練を全学で年1~2回実施しており、もちろん図書館としても参加している。しかし、特に図書館は開館時間中には常に多数の利用者が滞在する場所で、建物やフロアの数が多く、書架も林立しており危険度が高いことから、独自でも行うこととした。

2011年度の実施内容を基に、毎年少しずつ見直しを加えている。平日の午後の30分間を使い、その間は一時的にカウンターサービスを休止し、利用者にも協力を仰いでいる。

### 3.4. 館内施設・設備の改善及び災害対応用品の整備

2011年度以降、次のように施設・設備の改善及び災害対応用品の整備を行った。ただし、これで万全というわけではなく、常に見直し、充実を図っていく必要がある。

#### (1) 館内の施設・設備の改善

以前から問題とされていた雑誌棟の避難口の改修と、避難時に障害となる恐れのある古い給水器の撤去について、予算を確保して工事を実施した。

#### (2) 安全誘導のための措置

停電時の安全性を考慮し、通行の多い階段に蓄光テープを貼付した(写真5)。

教員・大学院生の書庫入庫時に、ミニ懐中電灯とホイッスルを渡すこととした。



写真5 蓄光テープを貼付した階段(左:照明点灯時, 右:照明消灯時)

#### (3) 災害対応用品の整備

ヘルメットを購入して学術・図書部職員全員に配付し、執務機の近くに置いている。

懐中電灯、拡声器を複数台購入し、事務室等に配置している。配置場所については、随時見直すこととしている。

### 3.5. 館内巡回

2011年度から、職員の防災意識の向上と、避難経路の状況や防災等に必要な物品の確認のため、係単位で毎月、館内の巡回を実施することとした。ただし、2013年度は実施していないため、2014年度以降、再開する必要がある。

## 4. おわりに

筆者は震災発生当時、東北大学附属図書館（宮城県仙台市）に勤務しており、図書館の復旧作業に1年間携わった後、2012年4月に当館へ着任した。震災の爪痕が色濃く残っていた3月31日までの生活とは一転して、東京では、震災は「過去のこと」として捉えられているような温度差を感じた。しかし、周囲の職員に震災当時の様子を訊いてみると、自分が東北で経験したこととは違う種類の影響があったことが少しずつわかってきた。当時の行動記録は特に残されていないとのことで、甚大な被害は受けていない地域でも、そのとき何が起きたか、人々は何を考えたかを記録しておくのもよいのではないかと思った。

このことがずっと心にひっかかってはいたものの、実行できないまま時間が経っていったが、きっかけとなったのが、「東日本大震災被災図書館記録ワーキング・グループ」<sup>3</sup>や「NPO 法人 20世紀アーカイブ仙台」<sup>4</sup>の活動である。これらの活動を見聞きするうちに、被災地でも、被害・復旧の事実は震災直後から記録・保存されているが、人々の記憶や想いを記録し伝えていくのはむしろこれからだと知った。当館においても、東日本大震災の記憶を記録し残すことは決して「今さら」ということはないのだと考え直して、職員にアンケート回答の協力を仰ぎ、本稿をまとめた次第である。

本稿の読者やアンケートに回答した職員が、いつ遭遇するともしれない災害を「他人事」ではなく「自分事」として捉えて考え続けるきっかけとなることを切に願うものである。

---

<sup>1</sup> 東北地区の大学による東日本大震災の記録は多数刊行されており、主に次のものがある。  
・弘前大学震災研究交流会. 東日本大震災弘前大学からの展望(2011-2012):それぞれの3.11. 弘前大学, 2013, 251p.  
・岩手大学総務企画部総務広報課. 東日本大震災: 岩手大学の対応・復旧・復興の取組. 岩手大学, 2011, 2冊.

- 
- ・東北大学災害対策推進室. 3.11 から記録と記憶をつないで、次代へ、世界へ：東北大学東日本大震災記録集. 東北大学, 2013, 219p.
  - ・石巻専修大学. 東日本大震災：石巻専修大学報告書：激震に揺るがず. 石巻専修大学, [2012]. (光ディスク).
  - ・学校法人東北学院東日本大震災アーカイブプロジェクト委員会. After 3.11 東日本大震災と東北学院. 学校法人東北学院, 2014, 652p.
  - ・宮城大学震災記録編纂委員会. 東日本大震災宮城大学 500 日の記録. 宮城大学, 2013, 90p.
  - ・「東日本大震災の記録」編集委員会. 東日本大震災の記録：2011.03.11-Tohoku Pharmaceutical University. 東北薬科大学, 2011, 136p.
  - <sup>2</sup> 首都圏の大学による東日本大震災の記録には、次のものがある。
  - ・東京大学. 東日本大震災に関する東京大学の対応：東日本大震災からの復興に向けて. 東京大学, 2013, 37p.
  - ・東京学芸大学. 東日本大震災と東京学芸大学. 東京学芸大学出版会, 2013, 287p.
  - <sup>3</sup> 国立国会図書館. 「被災図書館記録 WG」ウェブサイト. (オンライン), <http://kn.ndl.go.jp/static/libkiroku>, (参照 2014-1-30).
  - <sup>4</sup> 20 世紀アーカイブ仙台. ウェブサイト. (オンライン), <http://www.20thcas.or.jp/>, (参照 2014-1-30).

[Report]

*The Great East Japan Earthquake and Hitotsubashi University Library : the Librarian's Memories  
after Three Years*

Kojin, Sawako.

Department of Libraries and Information, Library Affairs Division, Hitotsubashi University